



王
 アカハスギン
 ストウ夫人
 リアガガウイダ
 アーヴィン
 王

世界
少年少女
文学全集

東京 創元社

7

世界
少年少女
文学全集
7

アメリカ編 1

第三十一回
配本

定価 380 円

昭和 30 年 3 月 25 日 初 版

昭和 34 年 4 月 15 日 10 版

訳 者 ^{たなか せいじ ろう}
田 中 西 二 郎 ・
^{まつ むら たつ お}
松 村 達 雄

発 行 者 小 林 茂
東京都新宿区新小川町1ノ16

印 刷 者 浅 野 剛
東京都大田区田園調布1ノ1314

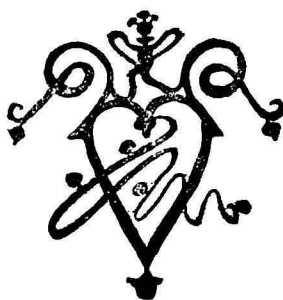
発 行 所 ^{株式 東} 創 元 社
^{会社 京}
東京都新宿区新小川町1ノ16
電話九段(33) 8511(代表)ー5
振 替 ・ 東 京 1565

万一乱丁落丁がありました
たらおとりかえ致します

印 刷 所 株式会社 金 羊 社
製 本 所 株式会社 鈴木製本所

Printed in Japan ©

目次

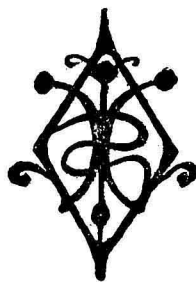


世界
第7卷

少年

少女

文学全集
アメリカ編
1





アンクル・トムス・ケビン

ス
ト
ウ
郎
夫
人
7

一 奴隷商人

二 若い母

三 イライザの夫

四 トムじいやの小屋

五 立ち聞き

六 シェルビー家の大さわぎ

七 子をつれて

八 三人のえらい人たち

九 バード氏の心配

十 わかれ

9

19

23

30

37

46

54

66

75

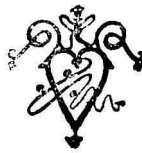
90





十一	見知らぬ紳士 ^{しんし}	99
十二	美しい川.....	110
十三	クエーカ宗徒 ^{しゅうと} の家 ^{いえ}	121
十四	小さなお友だち.....	130
十五	セント・クレア家 ^け のひとびと.....	138
十六	マリー夫人 ^{きじん} の生活 ^{せいかつ} と意見 ^{いけん}	147
十七	自由人 ^{じゆうじん} の守り ^{まも}	159
十八	ミス・オフィリア.....	177
十九	トムの手紙 ^{てがみ}	189
二十	ついに自由 ^{じゆう} を！.....	197
二十一	トブシー.....	205
二十二	クローの出かせぎ.....	221





二十三 湖^{みづうみ}のほとり

225

二十四 いとこどうし

231

二十五 エヴァのねがい

238

二十六 黒い天使^{てんし}

243

二十七 永遠^{えいゑん}のいのち

249

二十八 トムじいやの祈り^{いのり}

260

二十九 わざわい

264

三十 見捨てられて

273

三十一 レグリー氏^し

278

三十二 さびしい月夜

283

三十三 黒い目の女

291

三十四 しいたげられたひとびとの話

301





リップ・ヴァン・ウィンクル

解

説

訳

者

389

ア
村
ヴィ
達
雄
訳
365

四十三

解放者

361

四十二

めぐりあい

356

四十一

幽霊の出る話

351

四十

若主人

345

三十九

殉教者

339

三十八

キャシーの計略

328

三十七

勝利

321

三十六

トムじいやの決心

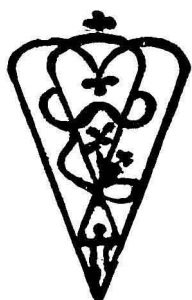
315

三十五

巻き毛のふしぎ

310





さし絵
そうてい

向井
初山

潤井
山

吉滋
し

アングル・トムス・ケビン

ストウ夫人

田中西二郎訳



一 奴隷商人



二月のあるうすら寒い日の午後四時ごろのことです。ケンタッキー州のP——という町の、あるりっぱな家の食堂で、ふたりの紳士が、めいめい、さかすきを前において、腰かけておりました。かれらは、召し使いもそばによせつけず、ただふたりっきりで、いすをぐっと近づけ、なにごとか、ひどく熱心に話してあっていました。

お話のめんどろをはぶくために、今まで、ふたりの『紳士』といってきたが、ふたりのうちのひとは、こまかく観察すると、ほんとうは紳士とよばれるような種類にはいらぬようにみえました。その男は、いやしい下品な顔だちの、背の低い、がっしりしたからだつきをしています。人をおしのけて出世をしようとする下等な人間によくあるように、いやに氣どって、そっくりかえっているようなようすでした。けばけばしいはでな色のまじったチョッキを着、黄いろい玉もようのはいった青いネッカチーフを首に巻き、わざと人目につきそうなネクタイを結んでいるところは、いかにもこの男の態度によくつりあっています。大きいごつごつした手に、たくさんの指輪をはめ、胸には重そうな時計の金ぐさりをつるし、それには、とても大き

な、そしてさまざまの色の印形が、たばになってぶらさげてあります——そのくさを、話に熱中してくると得意そうにふって動かし、さらさらと音をさせるのが、この男のくせでした。その話しぶりはぶえんりよで、正しい英語を話そうとするような気持もなく、ところどころで、いろいろ不作法な言いまわしをはさみますから、わたくしは、なるべくありのままに書きたいと思うのですけれども、そういうもんくは、とても、ここに書きうつす気にはなれないくらいです。

あいてをしている、この家の主人、シェルビー氏のほうは、紳士らしいようすをしていました。それに、この家の道具や飾りつけや、暮らしむきのだいたいのようすをみましても、気楽に、裕福に、まい日を送っていることが、わかります。さて、まえに申しましたように、今ふたりは、たいへん熱心に話しをしているさいちゅうです。

「まあ、わたしは、こんなふうにしたいと思うのだが。」と、シェルビー氏が言いました。

「そんな商売は、わたしにはできませんね——ええ、とてもだめですね、シェルビーさん。」客は、さかすきを明か

るいほうへかざして見ながら、言いました。

「なぜだい、トムは、ほんとうにめずらしい男なんだよ、ヘイリー。どこへだしたって、それくらいには売れるねうちのあるやつだよ——まじめで、正直で、どんなしごとでもできて、わたしの農場を、まるで、時計じかけのように、きちんと世話しているのだ。」

「あなたのおっしゃる正直というのは、黒んぼうどもの使うのと同じ意味なんでしょう。」ブランドイを一ぱい、ぐいと飲んで、ヘイリーが言いました。

「いいや、ちがうよ。わたしは、ほんとうに、トムが善人で、かげひなたがなく、わけのわかった、信心ぶかい男だというのだよ。あれは、四年まえに、ある野外礼拝で、宗教を信じるようになったのだ。その信仰がほんものだということを、わたしは、たしかに、信じているよ。そのときから、わたしはお金のこと、家のことも、馬のことも、みんな、あの男を信用して、まかせるようにしたし、この近所を、どこでも自由に歩きまわらせているんだよ。それでも、どんなことだって、トムは、きちんとまちがいなくやってきたよ。」

「世の中には、信心ぶかい黒んぼうなんて、あるはずがない、と思ってる人もありますぜ、おまえさん。」と、ヘイリーはぶえんりよに手をふって言いました。「しかし、わたしはちがいます。去年、オーリアンズへつれて行ったやつがひとりいたんですがね、そいつのお祈りを聞いていると、まるで、祈禱会へ行ったような気がしましたね——その男は、ごくおとなしいやつでね。おまけに、わたしにうんともうけさせてくれましたよ。貧乏して、財産を手ばなさなけりゃならなかった人から、安く買いましたからね。やつのおかげで、六百ドルのもうけになりましたっけ。ええ、たしかに宗教教ってものは、それがほんもので、こっちの思いちがいでないとするれば、黒んぼうにはけっこうなしろものでさあ。」

「うん、とにかく、ほんものの宗教が黒んぼうにあるのなら、トムのはそれだよ。げんに、去年も、わたしはシンシナチまで、トムをひとりで使いにだしたことがある。わたしのかわりに、ある取引をすませて、五百ドル持って帰るようにね。わたしは、そのとき言った。『トム、わたしはおまえを信用しているよ、おまえはクリスチャンだから、

わたしをだますはずはないと思っているよ。』とね。トムはまちがいなく、ちゃんと帰ってきた。わたしには、はじめからわかっていたことだ。いやしい男たちがトムに言ったそうだ——『トム、なぜおまえはカナダへ逃げなかったんだい？』『はあ、だんが、わしを信用してくれたからわしは逃げられなかっただよ。』——トムがそう答えたということを、そのれんじゅうがわたしに話したよ。まったく、トムとわかれるのが、わたしはつらいのだ。あの男のぶんだけで、あんたは、借金残りをみんなちょう消しにしてくれてもいいはずだ。ヘイリー、ねえ、そうしてくれらるだらうね、あんたにも良心があるんなら。」

「そりゃね、世の中の商人にも良心があるんなら、の良心なら、わたしだって持っていますよ——もっとも、ほんのすこしだってことは、ご承知のとおりで、まちがいありませんがね。」と、この商人は、おどけた調子で言いました。

「それからですね、わたしは、どんなことでも、道理にかなったことなら、友だちのご希望にそうようにするつもりでいますよ。けれども、なにしろ、この話は、どうもすこ

しばらく、ぐあいがわるいですね——どうもすこしばかりね。」商人は、じっと考えこんで、ため息をつき、またブランドイをさかすきにつぎました。

「なるほど、じゃ、ヘイリー、あなたは、どういう取引ならいいんだね？」シェルビー氏は、不安そうに、しばらくだまっていたから、言いました。

「そうですねあ、トムといっしょに、男の子か女の子をひとり、おまけにつけるようなのは、お持ちにはなりませんかね？」

「ふむ！——ひとりだって余分のはないね。ほんとうのことを言って、よくよくこまるんでなかったら、ひとりも売れる気はないのだよ。使っている者とわかるのは、ほんとうにいやなのだ。」

そのときドアがあいて、四つか五つぐらいの混血の男の子が、部屋の中へはいってきました。この子は、だれが見ても、美しいかわいらしいと思うでしょう。まゆから取ったばかりの絹糸のように細い、黒い髪の毛が、つやつやとちぢれて、まんまるな、えくぼのある顔のまわりにかぶさっています。二つの大きな黒い目が、明かるく、人なつこ

く、長いゆたかなまつ毛の下から、ものめずらしそうに、この部屋の中をのぞいていました。赤と黄の格子じまのはでなワンピースは、したてもていねいで、からだによくあいて、肉づきのよい、浅黒いその子の顔の色によく似あっていました。ちょっとはにかみながら、こわがらずに、何かおもしろそうなのにこに顔をしているのは、いつも主人に目をかけられ、あまやかされているしよこです。

「ほほう、ハリー坊か！」シェルビー氏は口笛を吹きながら言って、ほしぶどうを二にぎり、その子のほうへ投げてやりました。「さあ、それをみんなお取り！」

子どもは一生けんめいで、そのごほうびを手に入れようと、そのへんをかけまわります。それを見て、主人のシェルビー氏は愉快そうに笑っていました。

「ここへおいで、ハリー坊。」と呼ばれて、子どもがそばへきますと、主人はそのちぢれ毛の頭を軽くたたいたり、あごの下をちよっとつついたりしました。

「さあ、坊や、こんどは、おまえの歌やおどりのじょうずなところを、このお客さまに見せてあげなさい。」坊やは、黒人たちのよくうたう、そうぞうしい、おかしな歌の一つ

を、ふくよかな、すんだ声でうたい始めました。うたいながら、手も足も、からだぜんたいをおもしろおかしく、くるくる動かしてみせるのですが、そのおどりが、ちゃんと歌の拍子にあっているのです。

「うまいぞ！」と、ヘイリーが言って、四つに切ったオレンジのひとときれを、子どもに投げてやりしました。

「坊や、こんどはね、クジョーじいさんが、リュウマチになったときみたいに歩いてごらん。」と、主人が言いしました。

すると、子どもらしい、やわらかな手や足を、いかにもねじれて動かなくなったように見せかけて、年よりらしい背中をまげ、主人のステッキを手に持ち、そのかわいらしい顔を悲しそうにしかめて、あちこちに、ペッペッと、つばきまではきながら、部屋の中をびっこをひきひき歩いてみせます。

ふたりの紳士は、腹をかかえて大笑いしました。

「さあこんどは、エルダー・ロビンズじいさんが、賛美歌をうたうところをやってごらん、坊や。」すると坊やは、そのまんまるな顔を、おそろしく長くのばして、はじめく

さった表情をし、鼻声で、賛美歌をうたいだしました。

「やあ、うまいぞ、うまいぞ！ こりゃおもしろい子どもだ！」ヘイリーがほめました。「これは、ものになりますぜ、うけあいますさ。よしきた、おまえさん。」と、いきなりシェルビー氏の肩をつかんで、かれは言いました。「あの子を手はなしなさい、そうしてくれば、わたしは、話をきめますよ——きめますとも。そうしましょうや、これで、びったり話がまとまるじゃありませんか！」

ちょうどそのとき、ドアが静かにあいて、年のころ二十五ぐらいの混血の若い女が、はいってきました。

その若い女と子どもとをちょっと見くらべただけで、それが子どもの母だということがわかるでしょう。子どもとそっくりな長いまつ毛の下に、同じように大きな、あふれるようなながやく黒い目、そして、黒い髪も絹糸のようにつやつやと波うっています。茶色っぽい顔の色が、みるみる、ほおのあたりまで赤くなったのは、見知らぬお客がぶえんりよに、かの女の美しさに感心したのをかくそうとせすに、じっと見つめているのに気がついたからでした。着ているものもたいそうよく似あって、その美しいからだ

つきをひきたてています——ほっそりしたかっこうのいい手、小さな足やかかとなど、美しい女の売りものになる特徴をひとめで見てしまうのになれている商人は、すばやく一つも見のがさずに、目にとめてしまいました。

「おお、イライザか？」と、主人は、若い女が足をとめてえんりょがちにこちらを見つめたとき、声をかけました。

「はい、だんなさま、ハリーをさがしておりましたので。」すると、子どもは、母親のそばへとんで行って、自分のスカートに拾い集めたほしぶどうを見せました。

「いいよ、そんならつれておいで。」と、シェルビー氏が言いましたので、若い母親は、子どもをだきあげていそいで出て行きました。

「いや、また、これもたしかなしろものだ！」いかにも感心したように、商人は、主人のほうを向いて言いました。

「あの娘をオーリアンズへつれて行けば、いつだって、一財産でできますぜ。わたしは、今までに千人以上の女を見てきましたからね、あの娘よりいい値をつけたと思うのは、いけませんでしたね。」

「いや、わたしは、あの娘で一財産こしらえたいとは思わ

ん。」と、シェルビー氏はすげなく言いました。それから、話題を変えようとして、新しい酒のびんをあけ、この酒の味はどうだね、とお客にたずねました。

「とびきり上等——一等品ですな！」と、商人は答えて、それから、また向きを変えて、シェルビー氏の肩をなれなれしくたたきながら、言いだしました。

「いかがですな、あの娘を取引するとしたら、どうなりますかね？——わたしが値をつけましょうか——あなたは、いくらぐらいならいいんです？」

「ヘイリー君、あれは売るわけにはいかんよ。わたしの家内は、あれの目方だけの金貨をつんだとしても、手ばなすのはいやだと言うだろうからね。」

「なあるほど！ ご婦人というものは、みな、そんなことを言うものですよ。金勘定がわからないからね。それだけの金貨があったら、時計だの鳥の羽だの首飾りだのが、どれくらいたくさん買えるか、見せてあげるといいんです。そうすれば、一ぺんに、話が变わってくるでしょうよ。」

「まあきみ、ヘイリー、とても、これは話にならないよ。わたしは、ことわるよ、ほんとうにことわるつもりだよ。」